図4　柳河原左岸「苔むすトチに生えるオオバギボウシ」（H10年8月8日）

器の「お椀」や「御膳」を作る木地師が住む部落もあったという。

今はトチノキの大木は材が大きく、白くきれいなため、個人の趣味として、テーブルにしたり、ベンチにしたりしている。

・また、トチの花咲く時期になると、トチの蜜をとりに養蜂業者がミツバチの巣箱をもって、宇奈月スキー場に来る。

・将来は、トチの木の秋の紅葉のよさ、花の豪華な美しさで宇奈月ダム周辺を飾り、観光資源として考えてもよいように思われる。

6．おわりに

今後も今回のまとめを足掛かりに、これらのトチノキ及びその林をよく観察し、不備な点を補充していきたいと考えている。そして、調査の妥当性と正確さを期したく思っている。

（4）　主な参考資料

山渓カラー名鑑「日本の樹木」
北陸館「牧野新日本植物図鑑」
家の光協会「原色　コケ・シダ」
平凡社「日本の野生植物（草木）」
平凡社「日本の野生植物（木本）」

富山の生物　38（1999）

オランダの自然科学系博物館を訪ねて

布村　昇
富山市科学文化センター　939-8084 富山県富山市西中野 1-8-31

A Short Trip to the Netherlands, Especially to the Natural History Museums

Noboru Nunomura・Toyama Science Museum, 1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama-shi Toyama, 939-8084 JAPAN

私は、今まで30年近く等脚目甲殻類（ダンゴムシ、ワラジムシなどの仲間）を研究してきたた矢先、海外での先達や同業者に直接会って専門的な議論をしたことがほとんどなかった。彼らと日本の等脚類について紹介し、議論したいと思っていが、その機会が訪れた。1998年7月、オランダのアムステルダムで第４回の国際甲殻類シンポジウムが行われ、世界中の甲殻類を研究者の集会を機会に先だって等脚類の研究集会がもたれたのである。等脚類もまた、エビやカニと同じ甲殻類の一員である。

朝10時半に関空を出、午後３時にスキポール空港につく。国鉄に乗り、アムステルダム中央駅に着き、ホテル部屋に荷物を放むやいなや、会場のアムステルダム大学に走るが、この大学は有名な分散型校舎で、会場がなかなか分からずあせる。地図と表札をにらめっこし、近くの人に聞くが分からない、オランダ語ができないので、英語で聞くしかないが、何とか目的地見つけ、時間ぎりぎりに同じ等脚類を研究する仲間と会えた。手続を終え、ワインとサラダで乾杯。

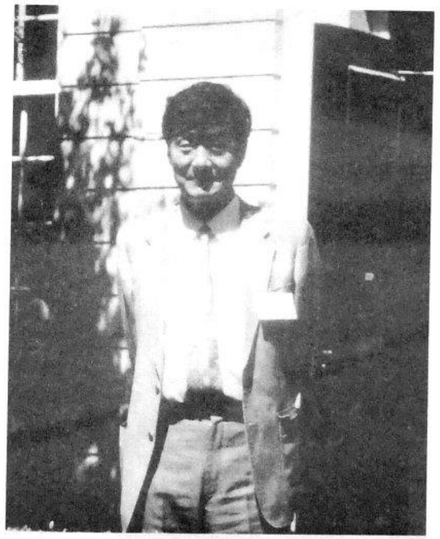

写真1
とりあえずアムステルダム大学に到着

翌日から、研究発表が行われた。ヨーロッパとアメリカ東岸それにブラジルなど大西洋岸の人が多いため、話の中心は地中海を含む大西洋が中心である。私の話の日本を含めた西太平洋のことは彼らにとって「見知らぬ土地」と言うことで興味を示してくれるが、ほとんどの学者が来たことがない地域であるだけにつっこんだ議論をすることが難しい。特に日本のワラジムシ相の形成については、多くの種類がここ100年以内に、欧州からの移入種であることが一つのポイントであったが、19世紀半ばまで日本が鎖国をしていたことさえ、誰も知らないので、動物学より歴史の話をしなくてはならなかった。日本産ワラジムシの分布の特性を考える上で、移入種であるオカダンゴムシやワラジムシなどが最優占種であり、その歴史は大切である。

さて、昼の研究発表が終わって夕方５時や６時といっても真昼のように勿論明るいし、夜10時でもまだ明るいのにはびっくりした。北緯52度といえばサハリン北部と同じなのであるから、当然なのだろう。したがって毎日各国の研究者たちが三々五々喫茶店やレストランで専門的な話や各国の話

写真2
５時を過ぎると飲み物をてに世界中の同好者の語らい（左端が筆者）

題が出る。いわば学会第２部である。私はたまたま、会場で知り合った中国人やドイツ人とともに公園を歩いた。落ち葉の茂ったところで、ワラジムシが見たくなり、私はオカダンゴムシやワラジムシだけだと思ったが、ドイツの友人はさすがに、藪へ潜っていってヒメワラジムシの仲間を取ってきた。これは空気呼吸のための偽気管を持たない原始的な科であり、温暖で湿潤な場所にすみ、日本では紀伊半島以南の亜熱帯的な天然林に生息するものである。属こそ違うが、こんなに高緯度に生息することを知識として知っていたが、生体を見るのは、やはり感激した。

なお、地元の人も異常だと言っていたが、７月半ばというのに真昼でも 15-17 度、夜になると10-12度まで下がり、４日後、やっと時間を作り、デパートで毛糸のセイターを買うが、その翌日から、温度が急に10度あがり、無用の長物となった。

後半の甲殻類学会になり、500名を越す人々が世界中からやってきた。日本の研究者も10人ほどやってきたが、初対面でも古くからの親友のように感じるのが不思議である。学会は１２時から１４時まで２時間の休みがある。早々と昼食をすませて、私はできるだけ多くの博物館を見ることにした。トラム（市電）を使えば主な博物館まで１０分前後で行ける。

動物園

市街地に近いプランタージュ・ケルクラーンにある動物園は家族連れでにぎわっていた。しかし、街中にあるとは思えないくらい、緑が多く、コウノトリが巣を作っていた。

通路の一角にキリンの首の模型であった。どこでもあるような子供たちが身長計だが、首がの一部が窓として開くようになっていると、内部構造がわかるようになっていた。長い首でも骨は他の哺乳類と同じ７個であることを示すためのものであるが、その原色の生々しい筋肉や骨格の色づけが今、解剖したばかりというほどに生々しく赤色彩がほどこしてあるのにはさすが、医学・解剖学の国だと感じた。

また、大きな「夜の道」を歩かせる建物があった。かなりの細い道を歩かせ子供の冒険心をかきたてる試みである。

昆虫館も人気のあり、大きな虫、ナナフシやタランチュラなどをさわらせたりしていた。特にご年配の女性が多く集まっていて、こわごわ手に乗せているのが見られた。実際に生きた虫、しかも大きな虫やふだん「怖い虫」をさわるというのも、貴重な体験である。

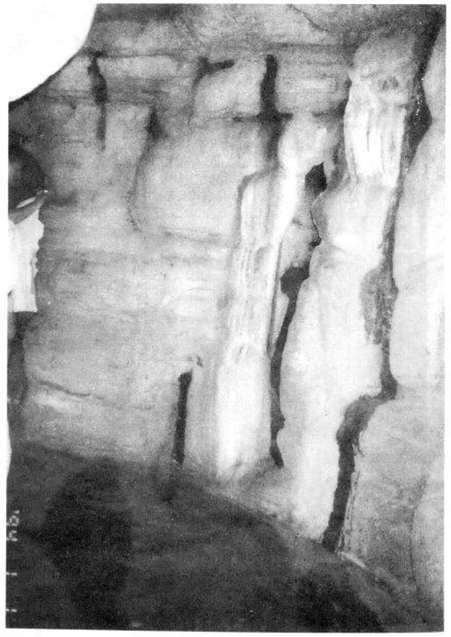

写真3
'夜の道探検

さて、水族館と動物学博物館も動物園の中にあった。動物学博物館だけ見たくても、動物園の入場券を買わなくてはいけないのが納得行かなかったが、ここには他に、地質学博物館やプラネタリウムまである。

水族館は、私のもっとも興味があった事がら、すなわち、アムステルダムに来て。まず思ったこと-これだけ豊富な運河の下にどんな魚がいるのだろう－という疑問に真っ正面から答えてくれた、すなわち運河のジオラマ風水槽の中に、そこにいる魚が泳いでいたのである。

動物学博物館は水族館内に有ったが、オランダらしく、ジボガ号による博物探検の成果にもどずく世界の海産生物が展示してあり、日本のタカアシガニやオオゴソクムシも展示されていて、大型種のためか、観客の目を引いていた。

人文系博物館にも自然を学べるものがある、熱帯博物館はプランタージュ地区にあり、古風で巨大な建物の研究所の一部が博物館になっていた。世界の熱帯地区珍しい資料のほか、熱帯各国の家庭の様子を忠実に再現してあり、それぞれの自然をうかがい知ることも出きる。また、大きな面積を裂いて環境問題を充てていた。半ジオラマの壁面に問いがあり、つまみを引くと中から答えが出るシステムであった。

アムステルダムで感心したのは、人々が博物館についてよく知り、誇りにしていることだ。道を尋ねるト自慢そうに教えてくれる。私が逆にドイツからの観光客に博物館を聞かれることもあった。上記の他にレンブラント国立美術館、ゴッホ美術館、植物園、市立美術館、ユダヤ歴史博物館、どがNo. 20という市電で効率よく回れえることであった。ほかにも海洋博物館が充実しており，新しい理工博物館は船の舳先を思わせるモダンな建物であった。

ロッテルダムとハーグを訪れる

2つの学会の間に半日休みがあった。それで、オランダ第二の都会であるロッテルダムに出かけることにした。オランダ国鉄の車窓からはのどかな酪農地帯が見える。ウシが草を食み，小川が流れ、色とりどりの花畑がみえる。レイデン、ハーグを過ぎ、アムステルダムからの４０分の旅であった。

ロッテルダム駅についてすぐに地下鉄に乗り、まず訪れたロッテルダム自然史博物館は小さな建物であった。入館者は全くない。展示室に入ると、剥製骨格が洒落た木の棚に並んでいる。特別な仕掛けのない、展示のストーリーもな分類展示の典型であった。

ロッテルダム海洋博物館は海洋立国としてのオランダらしく、立派な建物であった。多くの海や船に関係した展示があり、子供たちは水兵の制服や船舶の機具に憧れ、盛んにさわったりしている。ちょっとした展示だ合ったが、船中の食堂の展示は感心した。観客に気づかれないように、軽く斜めになっており、まっすぐ歩けず、フラッとする軽い船酔いに近い状況を作り出して、船にいるような臨場感があった。その横には「長崎の」コーナーがあり、日本語の古文書をオランダの人々がじっと見入っていたのが印象的であった。近くには船が停泊していて、その中に入れるようになっており、船の中を忠実に見せる展示があった。「船」や「海」はオランダに似合う。

レイデンにて-国立自然史博物館-

シンポジウムが終わり、飛行機に乗るまでの滞在最後の半日をレイデン（ライデン）へ行った。かの有名な国立自然史博物館を見るためである。

古風な建物の多いレイデンの町で、近代的なレイデン駅はその駅裏にあるのが、国立自然史博物館である。当初は大きな道を通って行くものとばかり思っていたが、レイデン駅から国立自然史博物館への道は写真のような道で小川には小さな魚の群れが見られた。自然史博物館への道に水草や小魚をみていけるというのは最高のアプローチと思った。

博物館の中に入ると流石に建物は新しいが古くからの歴史があり、数々の宝物を持っている博物館である。新館に移転したばかりというので、アメリカや日本に多い、ジオラマやパノラマ主体の

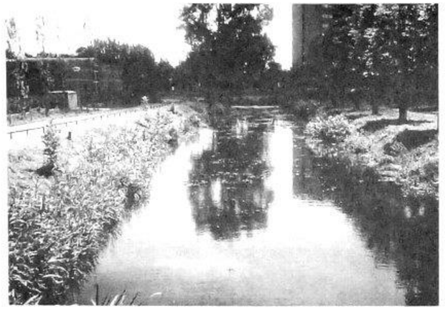

写真4　小川を横にみて博物館に入る

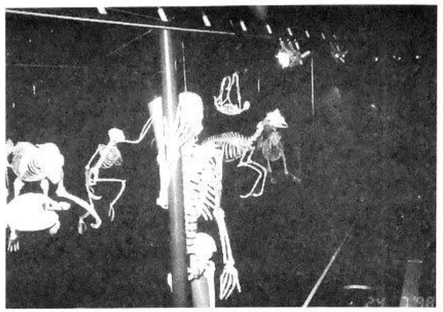

写真6　国立自然史博物館の展示、分類展示が多い。

展示かと思ったら、とにかく莫大な量の分類展示である。これはヨーロッパの自然史博物館らしいところかもしれない。日本産標本もかなり展示あり、深海生物をはじめとする海産生物はは特に充実していた。そして、膨大な標本を前に、母と子、あるいは父と子がそれぞれの標本を前に対話をしている姿は羨ましいと思われた。土曜や日曜は博物館に行って親子で語らう姿は文化レベルの高さともいえよう。また、多くの標本を綺麗に展示することのすばらしさっを改めて、認識させられた。富山市科学文化センターの次の展示予定になっているニホンオオカミを見たいと思っていた。「宝物の部屋」ということで午後1時から3時という時間限定で職員同伴の暗黒の部屋にあり、ガラスごしにあり、薄暗い光がつくだけであった。ここにはニホンオオカミをはじめ、モアやドドの骨などもあった。人類全体の宝物をしっかり管理していることは重要なことである。

写真5　国立自然史博物館

ここでも、子供達のための展示は特別に作ってある。小さな坂道を上り詰めると、床からは見えない動物などの展示物が現れてくるのである。「発見する楽しさ」を体験してもらうためと思われる。

都市の自然-日本に見られない感覚-

オランダの都市で感心するのは大都市でありながら、空気がきれいである。排気ガスの匂いがしない。なるほど自転車に乗っている人の多いことと市電の発達が印象的だ。大きな通りでも車は少なく、渋滞は見なかった。バスも郊外へ行くもののがほとんどである。タクシーもさすがにアムステルダムでは中央駅など少し見られるが、レイデンなどではタクシーをつかまえようとしてもは結局一台もみなかった。それで、ホテルを捜すときもゴロゴロと大きな音をを立てて重いスーツケースをひいて歩いた。また、トラム（市電）のウエイトが高い。近年、政策だと聞いた.。

大都市の広い道路には、中央からトラムの線路、自動車道、自転車専用道路、そして歩道となるが、道路が狭くなると市電、歩道と自転車道を残して、車道が消えているのはおどろいた.。また、歩行者がふらふらと自転車道にはいっても怒鳴られる。自転車のまま市電に乗れるし、国鉄もOKである。実際多くの市民は自転車とトラムで移動しており、環境に配意している。自転車好きもあるが、環境保全ということを国家的に取り組んでいるためかもしれない。オランダは海面より低い面積が多く、地球の温暖化防止に国を挙げて取り組んでいるよ

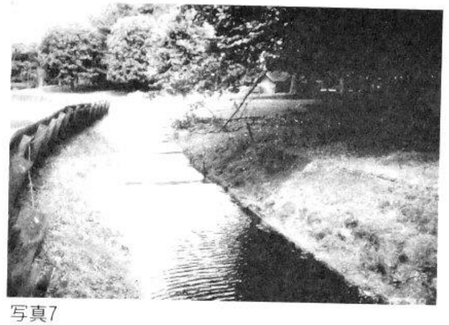

写真7
デン・ハーグ中央駅前。大都市の駅前とはおもえない長閑さ。

うだ。

オランダ第３の都会のデン・ハーグにも行った。デン・ハーグ中央駅は多くの市電、バスが発着する交通の要衝である。大阪の天王寺駅を思い出させる大きな四角い駅である。多くの人が歩いている，しかしその直前は、木々がうっそうと茂り豊かな森と小川があり、その横ではウシが放されている。まるで農村そのものであるのには驚いた。また、すぐ横は「ハーグの森」と呼ばれる林があり、この都心の駅からわずか100メートルほどのところで、原生林にいるような感じで、自然を満喫できる場所があったのだ。いつもの癖で、落ち葉の下を覗くと、良くたもたれた森を好む場所にだけ生息する種類のワラジムシがいたことからも自然の良さがうらづけられた。また、その森に至る小さな道路コンクリートでもアスファルトでもなく、アカガイの仲間の貝殻が敷き詰められていたことも感心した。

いろいろな都市の公園にも鬱蒼とした場所が多くあって、落ち葉も豊富に積もっている場所が多くある。実は、こっそりオランダのワラジムを見たくて、人がこない森をさがした。オランダ語で「何をしているのか」と聞かれるのがうっとうしいので、人のいない場所をさがしてそうとする。しかし、そこのような場所をを好んで散歩したり、ジョッギングの人も通るので、なかなかひとりで観察ができなかった。

さて、アムステルダムでもレイデンでも、町並みの美しさが目を見張る、どこを切り取っても一

写真8
オランダのシンボル-風車。この風車は風車博物館になっている。レイデンにて。

幅の絵である。教会や博物館ばかりではなく、民家も勿論新築の建築工事も行われているが、色と形は他の建物と同じである。この町の美しさのもうひとつの大切な要因は水である。近づいてみると結構、茶色っぽくなている所も有って、美しいとはいえない所もあり、水が淀むところには、ゴミも少しは見られるが、ドブのような悪臭を放っているわけではく、全体としてこれだけの大都会で、水質が良く保たれているほうかもしれない。

私にとって、オランダは風車とチューリップの国というイメージくらいしかなかったが、2週間、この国の街を歩き、市電にのり、町の人と話をしているうちに、オランダの人々の博物館にたいする考え方、自然環境との付き合い方とそれを生み出した長い歴史についていいろいろ学ぶことの多い旅であった。